

Stereo Sound

話題の新製品を徹底試聴する

BEST AUTUMN '87 PRODUCTS

井上卓也／菅野冲彦／柳沢功力

REVUE STEREO SOUND EDITION A TOKYO

No 84, automne 87

MEILLEURS PRODUITS DE L'AUTOMNE 87

Compte rendu de Monsieur Yanagisawa

●スピーカーシステム

ロジャース LS7t——P.389
タンノイ Westminster/R——P.386
Stirling/HW——P.386
トレンス・ジャンムラー JM325D——P.390

●CDプレーヤー

パイオニア PD-3000——P.398
アーカム DELTA70——P.407
カリフォルニア・オーディオラズ TEMPEST——P.406
マッキントッシュ MCD7005——P.396
スチューダー A727——P.394

●プリメインアンプ

アルパイン/ラックスマン LV-II7——P.411
パイオニア A-90D——P.404
オーディオラズ 8000A——P.410

●コントロールアンプ

アキュフェーズ C-200V——P.402
ナカミチ CA-50II——P.409
コンラッド・ジョンソン PV-5——P.408
SME SPL-IIHE——P.392

●パワーアンプ

アキュフェーズ P-300V——P.402
オーディオリサート M-300——P.400
コンラッド・ジョンソン MV-50——P.408

●カートリッジ

イケダ IKEDA9C——P.412

●ヘッドアンプ

2R THE GRYPHON——P.413



ある。要するにハケでひと撫でしてやりた
いような気分。ジャズの場合はこれがバリ
ツとした再現にも通じるが、でも何となく

不自然に張りの強い感じではある。
もっとも、僕の試聴したのはまだ試作機
のようで幾つかのコメントが添えられてい

て、その一つに、量産機では現状より中高
域を少し押さえる予定、とあった。確かに
ハケでひと撫でしたいのは、帯域でいえば

中高域。僕にとって少し気になった部分が
押さえられる、ということなら上等だ。

●型式：バスレフ・フロアー型 ●使用ユニット：ウー
 ー・25.0cmコーン型、スクーアー・5.0cmドーム型、トワイター
 ・2.5cmドーム型 ●許容入力：200W(ピーク) ●出力音圧レ
 ベル：92dB/W/m ●周波数帯域：25Hz-22kHz ●入力イン
 ピーダンス：3Ω ●クロスオーバー周波数：600Hz、3.3kHz
 ●外形寸法/重量：W100.3×H32.8×D37.6cm/42kg

●トールレンス・ジャン・ムーラー——スピーカーシステム

JM325D

予価 ¥840,000(ペア)

鳴らし込んだ結果が楽しみな素性の良さを持つ

トールレンスが目をつけたスピーカー。見た目も美しく手のかかったつくり。肌触りがいい

スイスのトールレンスは、ご存じのように

オルゴールのメーカーからスタートし、だ
 からオーディオメーカーといってもプレ
 ーヤーが専門、というのはとても分りや
 すく納得のゆく話だ。

でも、わが国には入ってこないがヨーロ
 ッパに行ってみると、トールレンスの製品は

プレーヤーばかりではなくアンプもスピー
 ーカーも揃っている。日本に入っていないの
 は、それらがトールレンス・ブランドではあ
 っても自社製ではなく、いわゆるOEM製
 品だということもあるだろうが、それ以前

に、製品のグレードがミニコン級のもので
 トールレンス・ブランドのものとしては日本
 市場には不向き、との理由が大きいのだと
 思う。

だが今回のスピーカーは別のようで、こ
 れはミニコン級ではなく本格コンポーネン
 ト級。もっともこの製品はヨーロッパでも

トールレンスではなく「ジャン・ムーラー」
 のブランドで売られている。ただし発売元
 はトールレンスだし、資金面も依存しての生
 産というから、トールレンスが、これぞと目
 を付けたスピーカーということだ。これが
 日本では「トールレンス・ジャン・ムーラー」
 のブランドで発売されることになった。

●手堅い設計としっかりしたつくり

ジャン・ムーラーとはローザンヌに住む
 若手スピーカー設計者の名。そして彼の3
 機種の出た中トップモデルがこのJM3
 25Dなのだが、これが、単なるアッセン

ブルだけを手がけるのではなく、ユニット
 もエンクロージアも自社製というからな
 かなかのものだ。

そのユニットは3ウェイ構成で、ウーフ
 アーは25cm口径コーン型。ミッドレンジと
 トワイターは5cmと2・5cm口径で、と
 もにソフトドーム型。これらのユニットが
 位相を整えた階段状の配置でマウントされ
 高さ1mほどのトールボーイタイプに仕上
 げられている。

エンクロージアも相当に手のかかった
 もののようで、例えばリアパツフルは二重
 構造で間に砂を充填し、不要振動を押さ
 えている。さらに、このリアパツフルを
 支えに、ウーファーおよびミッドレンジ
 のユニットはボルトで後ろからガツクリと
 押しつけるような構造を採り、エンクロ
 ジアの強度を高めるとともに、ユニット

の取り付けもより強固なものとしている
 そしてエンクロージア天板には、化
 粧もかねた厚さ3mm程度のガラス板を乗
 せるなど、見た目にも美しく、かつ、なか
 か出来の良さを感じさせるものだ。

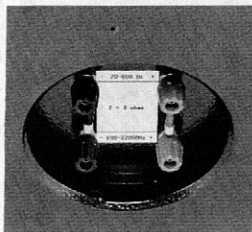
近頃の新しいスピーカーというと、奇を
 てらったかと思いたくなるような、珍作、迷
 作ユニットやエンクロージア構造にお目
 にかかることも少なくないが、このモデル
 の場合にはむしろオーソドックス。地に足
 のついた手堅い設計の印象もいい。

●味の濃い魅力をもつ

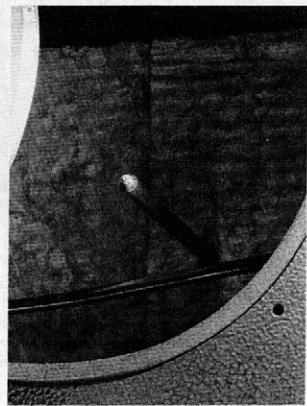
その好印象はサウンドにもちゃんと反映



スピーカーの下部には反射による影響を抑えるため
 スポンジが貼られている



▲バイワイヤリングが可能なスピーカ
 ー端子は底板にある。



▶先端がとがった金属支柱がリアパ
 ツフルから伸びており、ユニットを支える。

少のぎこちなさなどはさておき、ともかく
 全体としての素性の良さだ。極端に偏りす
 ぎたキヤラクターや、一人よがりのインチ
 キ臭さなどは微塵もない。

傾向としては、音をぐんぐんと前に出す
 鳴り方や、軽やかに広がるといったタイ
 プではなく、少し派手さを押さえ、音場も
 やスピーカーの奥に構築されるような感じ
 だ。ただし、雰囲気暗かったりするのではな
 く、むしろ明るく、肌触りがいい。

じっくり腰を据えて聴いてゆくと、例え
 ば弦楽器の現れたかたやヴォーカルなどは、
 想像以上にコッテリとした味の濃い魅力

備えているようで、ポイントをつかんで上
 手に鳴らし込んでゆけば、楽しみな結果も
 生まれそう。

ところで、細部の多少のぎこちなさなど
 は……と、奥歯に物のさはまったような言
 い方をしたが、実は、前述のようないろ
 ろな面での魅力は確かなのだが、現状の音
 には、まだ完全にシステムとしての音のま
 とめが出来上がっていない、と思わせる、
 ある種のぎこちなさを感じたわけだ。

例えばオーケストラの狂など、ややキツ
 イ響きになりそうな気配がある。ヴォーカ
 ルも肌触りの良さを持ちながらも、少し子
 音のあたりを強めたような、引掛かりが

柳沢功